



3月例会で語る在りし日の江口三雄兄（撮影：小笠原兄）

阿佐ヶ谷教会



信友会会報

3月例会（3月22日開催）報告

「使徒言行録の学び」（第20回） 大村 栄 牧師

—新約聖書 使徒言行録 第20章—

次第に濃くなっていく新緑の瑞々しい梢が見られるようになり、過ごしやすい季節になりました。しかし、私達の副会長であります江口三雄兄が4月18日急性心筋梗塞の為、天に召されました。残念です。江口兄の静かな笑顔を覚えつつ、信友会の2015年度の新しい歩みを始めましょう。昨年に引き続き『聖霊行伝の歩み-使徒言行録の学び』を例会の中心とし、私達の信仰生活を一層深いものとして行きたいと思えます。今年度の信友会の豊かな歩みと、会員の皆さまに日々健康が与えられますよう、復活の主になん静かに祈りたいものです。（YH記）

「聖霊行伝をたどる—使徒言行録の学び—」第20章

大村 栄牧師

パウロの第3回伝道旅行

前回の19章では、パウロがエフェソでアルテミス神殿の模型を造ることに対して「手で造った者は神ではない」とこの地方の多くの人々を説き伏せたことに、「女神アルテミスをないがしろにする者」と腹を立て町中が混乱した事件がありました。この混乱の中で町の書記官が、暴動という手段で解決するのではなく正式な裁判を起こすべきだと言ってその場の混乱を収めました。

第20章は、この混乱の後、パウロはエフェソの弟子たちを励ましてからマケドニアに出発しました。この地方でも言葉を尽くして人々を励ましながらギリシャに来て3か月を過ごしました。このギリシャの町とはアカイア州のコリントです。コリントはギリシャ伝道の拠点であり今回の滞在中にここで「ローマの信徒への手紙」を書いています。第2回、第3回の伝道旅行は、異邦人伝道や拠点になった教会を再建することもあります。もう一つの目的は疲弊したエルサレム教会への募金活動であり、行く先々から募金を集めてエルサレムに持って行くことでした。エルサレム教会では、ローマやユダヤ王国による締め付けや、この地方で長く続いた飢饉により教会は弱体化していたのです。

パウロたちはコリントからシリア州に船出しようとしたが、またもやユダヤ人の陰謀があったのでマケドニア州を通過して帰ることにしました。同行者はベレア出身のソパトロ、テサロニケのアリスタリコとセクンドなど有力な教会の代表7名でした。彼らは先に船出してトロアスで待っており、パウロたちは陸路でフィリピン行き、そこから船でトロアスに行き合流し7日間滞在します。

7節では、週の初めの日にパンを裂くために集まりますが、食事ではなく礼拝のためです。翌朝の出発を控えた集会であるため大勢の人たちが集まりました。話は夜中まで続き、3階の窓に腰を掛けていたエウティコという青年が眠気を催して転落し死亡します。パウロは降りて行って上にかがみこみ抱きかかえて「騒ぐな。まだ生きている」と言って2階に行ってパンを裂いて食べ、翌朝まで話を続けて出発します。死からの復活は聖書には、ラザロやヤイロの娘の復活などがあります。人々は青年を連れて帰り、大いに慰められたと書いています。

この「慰め」と2節にある「励まし」は同義語であり、単なる慰めでなくそこに神の言葉を語る者の力が隠されています。



エフェソの長老たちへの惜別説教

帰りの旅程でもパウロたちは苦勞しており、皆はアソスに船出するが、パウロはアソスまで徒歩で行き合流して船に乗ります。そしてミティレネ、サモス島を経由してエフェソの南30キロのミレトスに着きます。パウロは初めからアジア州の伝道の拠点であるエフェソには立ち寄らないことにしていました。できれば五旬祭にエルサレムにいるため旅を急いだのです。ユダヤ人は、ユダヤ教の3大祭である過越祭、仮庵祭、五旬祭にはエルサレムの神殿に参拝する習慣があり、革新的なパウロもユダヤ人の習慣を重んじる人であったようです。パウロはエフェソに人をやり教会の長老たちを呼び集めます。そしてエフェソの長老たちに話し始めます。これが有名な惜別の説教です。

3回のアジア、ギリシャへの伝道旅行を終えるにあたり、パウロはこの方面への伝道旅行が最後になることや、これから蒙らなければならない艱難を思って、伝道旅行の総仕上げとしての説教をすることにしました。惜別の説教は、第18節からこれまでのパウロが行ってきた伝道について、22節からはこれからエルサレムに上り苦難や投獄されること、25節からは、この地方の教会への要望や心構えを説いています。

第18節からは、アジア州に最初に来た時からのわたしの行動は皆さんの知っているところです。最初の伝道ではわたし自身は取るに足らない者だと思いながらも、涙を流して語り、ユダヤ人の陰謀を受けながらも主に仕えたこと。役に立つことは一つ残らず教え伝えてきたと言います。21節では、福音の内容である「神に対する悔い改めとわたしたちの主イエスに対する信仰を、ユダヤ人にもギリシャ人にも力強く証してきたのです」。22節では、「これから霊に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか何もわかりません、23節、ただ投獄や苦難とが私を待ち受けていることだけは、聖霊がどの町でもはっきり告げて下さっています」。そして24節で「しかし、自分が決められた道を走り通し、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証するという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません」と決然と言い切っています。

悔い改めと、招きへの信仰

「神に対する悔い改めとわたしたちの主イエスに対する信仰」とは、マルコによる福音書第1章15節のイエスがガリラヤで語られた「時は満ち、神の国は近づいた、悔い改めて福音を信じなさい」という伝道の第1声が想定されます。また、ルカも悔い改めの福音を多く引用しており、ルカによる福音書第15章では、1節から「見失った羊」、8節から「無くした銀貨」、11節から「放蕩息子」の喩が続きます。放蕩息子では、若さに任せて神に逆らい分け与えられた財産を使い果たしますが、自分の間違いに気が付いて帰ることができました。これが「神に対する悔い改め」です。神さまは毎日戸口で待っていて下さり、息子の帰還を喜んで盛大な祝宴を催してくださいませ。

一方、迷える羊は帰りたくとも自分で帰る力がないのですが、羊飼いであるイエスが谷底まで迎えに来てくださいます。これが「わたしたちの主イエスに対する信仰」です。私たちが神の招きとキリストの呼び声に応える生活ができるよう願うものです。

このように、パウロは、「神の恵みの福音」を困難のなかでも語り続けて、このためなら命さえ取られても悔いはないと言い切ったのです。

25節では、パウロがもう二度とこの地方に来ることができないことを伝えます。そして、パウロが渾身の力を込めて「神の恵みの福音」を語り続けてきたので、人々がこれを見損なってもパウロの責任ではない。神のご計画をすべて、ひるむことなくあなた方に伝えたからですと言います。

28節からは、あなたがた自身と群れ全体に気を配ること、聖霊は神の御子の血によってご自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者にしたと宣言します。そして、パウロがいなくなった後には、残忍な狼どもがあなたがたのところに入り込んできて群れを荒らすこと。また、あなたがた自身の中から邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れること。「だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起して、目を覚ましていなさい」。パウロは、3度の伝道旅行を通して、多くの苦難と血を流して作り上げてきたエフェソの教会を、皆さんで守り続けてほしいと切々と語っています。

パウロの涙にまさる神の愛

パウロが2回の伝道旅行を通して創り育てたエフェソの教会への愛を越える愛があります。今は、レント、十字架の時を迎えています。創世記のノアの物語では、神は人間が悪に染まっているのをみて、人間や家畜、這うもの、空の鳥を創ったことを後悔して、神に従う無垢なノアの家族とひとつがいつの動物たちを残して洪水を起こしてすべて滅ぼします。神は洪水を終えてから、創世記8章21節で「人に対して大地を呪うことは二度とすまい、人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ。わたしはこの度したように生き物をことごとく打つことは二度とすまい」と反省します。しかし、人間は過ちを繰り返します。神はここで「この度したように」、過ちを犯す人間を滅ぼすのではなく身代わりをたてて、しかも独り子イエスを十字架に架けて人の罪を赦して下さったのです。甚大な犠牲を払って異邦人の教会を、いや私たちの教会を守り、自分のものとして下さったのです。

32節では、パウロはこの惜別の説教の結論として「神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだね、この言葉はあなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです」と言います。そして、パウロが他人の金銀にたよらず、自らの生活や共にいた人々のためにも働いたことを。35節では、あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が「受けるよりは与える方が幸いである」と言われた言葉を思い出すようにと、私はいつも身をもって示してきましたと言い、これらを、エフェソの教会の規範として教会を守ってほしいと言って説教を終えます。そして皆と一緒にひざまずき祈ります。人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻しました。また、パウロがもう二度と顔を合わせることがないと言ったので非常に悲しみ、パウロを船まで見送りに行ったと書かれています。パウロはこの惜別の説教を行って3回に亘ったアジア、ギリシャでの異邦人伝道を終えて、エルサレムに向かいます。

(文責：玉澤武之)
